

## 望郷史話 (一)

東京都  
会員 御手洗 一 而

あれこれの気易さ、

妙なことから、佐伯史談会の撒網致である「佐伯史談」に寄稿することになつて、はたと当惑した。羽柴先生から「望郷史話」の美辞を頂いたが、史話となるどうもやり難い。自分の文章のくせがあるからである。その上歴史となると門外漢である。

しかし、そんなことにはお構ひなしに、二三の題を選んだ。そして書いているうちに、レベルの高い「佐伯史談」の雑記帳を綴っておきたくなつた。

「あれこれ」として、自分のメモを纏めるのは何の抵抗もいらぬ。文章が冗長にならうと、舌足らずにならうと関係なく、くせき気にすることもない。全くの気休めである。だいいち分らないことを調べる必要もなく、そのまます書き下ろせる気楽さがある。そして素人の雑談の楽しさの中に、余りにもふる里を知らないのに驚いた。

私の歴史への回顧は、祖先を知ることであつた。手近に材料があつたのも幸いしたが、百年も前になると、もう分らない。父―祖父―曾祖父とさか上ると、丁度明治維新になる。私の父祖が、五長の役職で食べた時代、庄屋の名残りから今度自分のかで食べてゆく生活の切り

替えには、大へんとまどうたに違ひない。

出自は藤原氏らしいが、清原氏の出になつてゐる。二葉の系図が、無難作にくつつけられてゐる。中には、当時の行政区分に、日本歴史のわく組みの中でも、参考になる資料がある。徳川中期に、依五郎という爺さんが、一度これらを研究、整理した形跡がある。大へん有難いと思ひながら、それから百七、八十年経つてゐるのに気がついた。

今では歴史書も資料の研究も、先学の書物によつて調べられるが、今調べておかなくて、子孫のすべてが祖先の歴史に興味があるとは思われぬ。また百年、二百年経つたらと思ひながら、とうとうその整理にのめり込められた。

ところが大へんである。同じ日本人の、しかも血のつながつた祖先の書いた字が読めない。古文書もあれは日記もある。これには弱つた。

それから、もう一か國語の勉強を始めた。土と私、語学の勉強は大好きであつた。英語は近頃の若者に日常談話になりつつあるが、私は、陸士時代はロシア語をや、法学生のとときは、ワイマル憲法のドイツ語と民主主義の転換で、英米法の比較を余儀なくされた。しかし四十歳になつてから、自國語の勉強をやらずはめになるとは、思ひもよらなかつた。祖先の爺達がついてゐるが、苦笑してゐるが、これは見物である。

書名字を見てみると、必ず子供の時の習字の先生を思い出す。お師匠さんといつた方がよいのかもしれない。今でも山際に住んでいられると思ふが、森神先生である。もうだいたいお年と思われぬが、佐伯市史で、文化活動

をされる先生のご健在を知ってなつかしい。温和を頼んで後ろから筆をとってくれた少年時代を思い出す。久成寺か善教寺かの展覧会で、よく金賞を貰った。先生から生涯の書を頂く約束が、今だに果せず悔やんでいる。帰郷が少なくて、良い弟子ではないのだが……。

漢字を見ると、有馬のネコ先生を思い出す。中学生時代の漢文の先生である。有馬だからネコのニツクネームをつけられたが、考えるとこれは歴史師である。漢文は当時の受験科目にはなかったが、とにかく私は好きであった。

先生の最初の授業は、「お前の名は『一而か』と空間に指で書きながら、うなずいていた印象は今でも忘れられない。而の字は、今では当用漢字になく、それより『いちじ』と正式に自分の名を読んで貰ったのは、未だかつてネコ先生一人である。小学生の頃に父を亡くした私に、論語の一頁にある「学而第一」からとった名前前であることを知ったのは、三十歳の頃である。その時、うなずいただけで、教えてくれなかった漢文の先生だけに、尚更印象が強い。そして御家流の漢文体のくずし字を見る毎に、いつも両先生を思い出す。

自分自身が、これだけ古文書の解読に苦勞すると、子孫に残す文書文体に、つまらぬ思いやりをしなくなる。紙をえらび字体をえらんで残すべきものと、面白く子供に読ませる物語と区別することにした。しかしこれは余計な思いつきであった。人間の生活を書く煩雑さを知らなかったからである。五つのWといわれる報道記事の原則は、同時代に生きる人に読んで貰えばよい。同じものを着て、同じものを食べ、生活様式を同じくする同世代人である。しかし時代が違つたとそうはいかない。

最初に米水津村の竹野浦に、落武者として流転した私の祖先は、伝承では佐伯氏の客將ともいわれているが、一体どんな生活をしていたのであるか。

これは全くの原始人の生活が想像される。衣は着のみ着のまま、食は山菜に魚、住は今でいうバラックだが、一枚の板が上手に作られたらうかと、櫓鉋・大鋸まで運想して、夢は抜がってくる。

竹野浦は、今では祖先の故地になつてはいる竹藪、孟宗竹の発生源をとったものであるか。とすれば、宋時代とこの流着の時代検証は大丈夫かな、とか、入津湾には竹野浦河内という地名がある。河内とはどんな意味であるか。

また、交通機関は当時では船を頼るしかなかったが、船が大体三十年の寿命と、次の造船はどうしたのであろうか。先住民との同化、佐伯氏の保護と、夢というより謎が広がってゆく。

しかし、実際にこれら先祖の生活がどうなつて、現在の私がある。一事が万事、調べるには氣の遠くさるような興行である。反面、こう考えたであらう著者の推理が、百年、二百年後一つの古文書の証として復讐される喜びもある。こんな時は、やはり続けていってよかつたと思ふ。そして今では私は推察の楽しさにこつている。

古軍記にもある木の棒、火鑽材と火鑽白で火と起こしてみたいし、形だけでよいから、自分の着物を織つてみたいし、自分の字を書き残す一枚をすいてみたいと考えている。そして、平安の人となつたり、鎌倉の人となつたり、戦国の武將になれたら、どんなに書き易いだらうかと念じている。

史話ならぬあれこれは、全く書き易い。これからも、

思いつきのまま「あれこれ」を記して、ふる里を思ぶよすがとしたい。

佐伯肩衝のこと

いつだったか、名器争奪戦の歴史小説の中で、佐伯肩衝について書いたことがあった。(鴻肩衝・肩衝茶壺)

たしかこの肩衝は、將軍足利義輝から大友義興へ、義興が臼井紹舟に与え、島津家久の壁後侵攻で家久の手に渡り、梓峠の合戦で、佐伯惟定が取り返した事になっている。ここから先、すなわち、惟定が除斥され、藤堂高虎の元に寄食してからが問題だった筈である。大友興廢記では家康什物が、什器と書いてあったと思う。

今日、調べもののついでに、人物往來社の「日本の合戦・豊臣秀吉」を讀んでいると、次のような事を書いてあったので、早速書きとめることにした。

「……のちにこの肩衝は、惟定が浪人となって、藤堂高虎に寄食した際、高虎に贈った。高虎はこの名器を愛して子高次に伝えたが、高次致仕のとき徳川幕府に献じた。世に佐伯肩衝と称せられるのがこれである。」

なるほどそうかと思った。しかし、前記の家康什物が氣にかかると、幕府に献納なら話は簡単だが、家康となると、また年代を調べねばならない。高虎が没し、子の高次が家康に献じたものか、これには家康在職中か、駿府に隠居してからか、また秀忠將軍の時代かということになる。且又、右の由所になる文献も明らかにおきななものだが、とりあえず、惟定から高虎に贈ったことだけは、これではつきりすることが出来た。そして現在、現存するか、あればどこに保存されているか、それが問題である。

知りたいたいことと分らないことは、関連して調べることによって解決できるときがあるが、調べても分らないときもある。

佐伯市といえど城山と番匠川を連想する。城山についてはいろいろな本に書かれているが、番匠川の固有名称についてはどうだろうか。一体いつ頃から名づけられて、最初に見える文献はどれだろうか。五分分の一の地図を見ると、榊原礼の山ひだが番匠川に突き出るところに、日豊線の番匠川を渡る鉄橋があり、小田と上岡に挟まれて、番匠という地名がある。

この地名と河川名とは、どんな関係があるのだろうか。番匠とは工匠というように、現在の大工に相当する職種をさす言葉として認識しているが、これと川名との相関関係が異様な気がする。どちらが先か分らないが、大工を職業とする番匠は、そんなに古代からあった訳ではない。日本の歴史を調べても、せいぜい大和朝時代であるうが、川は万古の昔から流れている。さて何と云ったか。番匠の地名は、大工さんの住んでいた集団地域ではあるまいか。そうだとしたら、佐伯氏の歴史に関係がありそうだが。高城山と榊原礼山との中間に位置して、古市が榊原礼山城の城下町だと知ると、変な場所にある。城下町といっても、きちんとした城割りがあった時代でもないから、別に不思議でもないが、番匠川はいかにどうと、つぎで、理解に苦しんでいる。建築に関係のない番匠かも知れないが、どうして佐伯川ではなかつたのだろうか。

時代の進展はしかたがないが、地図まで取り換えられ

るのにはどうも弱る。

高政の時代に、佐伯頼津久見村の警固屋と、白杵領津久見村の奥丸・奥河内と交換している。大坂本村の警固屋がそうらしいが、確認できないまま、そのままにしてあった。奥丸・奥河内も同様である。近頃になつて、津久見市内に警固屋とあるのが分つてほつとした。そしてその時に、津久見川（不明）の上流に、奥丸・奥河内の右前と見つけた。これが高政時代の白杵領との境界線の概略を知つたが、私は、むしろそれ以前を知りたかつた。

宗麟が津久見に隠棲するのは、天正十年（一六三二）頃とされ、寂没が天正十五年である。この頃佐伯惟定の時代に、同じ状態だったのだからか、してみると宗麟は、大へんを国境の地に隠居地を送んだものである。

秀吉の豊後分割まで、津久見湾一帯は白杵領であつたのかも知れない。大友興廢記の津久見西浦の薩摩水軍侵入の項では、何領と記載がなかつたと思う。又「鶴谷叢誌」に龍溪先生が、堅田合戦について古戦場記を書いておられたが、その時も、津久見湾は佐伯領ではなかつたのではないかと記してあつた。惟定文書による佐伯水軍を調べる上に、どうしてもこの行政区分を知りたいのだが、資料がない。

秀吉の慶長檢地が頭に浮かんできた。そして、津久見市史が編集されていたら、手に入りたいと思つている。豊後分割の各国境界線は、はっきりしないかも知れないが、いずれにしても、この頃の佐伯領支配は不明瞭である。

### 敬称について

人を呼ぶ時には、普通「誰々さん」か、呼び捨てに「誰々」として間に合う。しかし、手紙では宛名に「誰々

さん」とは書かず「誰々様」とか殿と書く。このようにものを書く場合に、人名の敬称をどうするか、私にだけは重大問題である。

尊敬する矢野文雄先生に例をとると、文雄と書くところなく、龍溪と書いた方が分り易いときがある。明治文学全集にも「矢野龍溪集」とある。文芸ものを書く場合が龍溪で、政治家が文雄かというところでもない。公文書以外は、龍溪の方がよく知られている。

しばらくして、ふとこんなことに気がついた。史談とか史話とがエッセイを書く場合と自分ら異なり、論文の場合には又性質がちがう。しかしこれだけで自分なかつた。

私は矢野先生には一面識もないし、お声も聞いたことがない。昭和の初めは同世代人でありながら、私のイメージの中には、すでに過去の歴史上の人物になつていた。しかし、一面識でもある人は、先生と書かないと何か良心ががめる。私の意識の中には、自然にそんな力が出来上つていたのである。一面識がなくても、現在ご活躍中の人も同じことがいえる。

そんなことで、矢野文雄とは書きにくい、龍溪とは書き易い。かといつて、矢野文雄先生と書いても、龍溪先生ではどうもだぶるような気がする。龍溪の中に、先生という尊敬の意志表示を含んでいるとするのは、私一人よがりかも知れない。

毛利高政にしても、高政とするか、高政公とするかで、その時々には注意することになっている。そして敬称を考へることによつて、その人との心のつながりを持ちたいと思つている。

(おことわり) この項ページに制約されて部分割愛を余儀なくされました。お許し下さい。(編集者)